ルターにおける「体験」の問題

——一つの覚書——

"Sola experientia facit theologum"

今井　晋

一

G・エーベリンクは『神学という事柄への問としての神学における体験の欠如についての告発』(G. Ebeling, Die Klage über das Erfahrungsdefizit in der Theologie als Frage nach ihrer Sache 1974— Wort und Glaube III 所収) という論文の劈頭に、次のような趣旨の警告を発している。「体験の欠如」(Erfahrungsdefizit, Erfahrungsmangel) は神学にとって致命的な疾患を意味する。この欠如現象は構成的制約すなわち、神学に本性上伴う弱点であるのか、それともこれは神学の対抗しようのない時勢によってひきおこされたものであるのか、という問を投げかけ、その帰結は同じであるという。神学は明らかに近代人の体験の洪水を把捉できない。そしてこのコントラストによって、神学自身の体験の欠如がそれだけますます顕著になる。神学はこのため、まさに破滅に瀕しているというの

である。

彼は得意とする詳細な言語学的分析や解釈にもとづき[1]、また思想史的にもルターにおける「体験」(experientia, Erfahrung) の重視に注目しようとする。そして次のようなルターのテキストを引用する。

「それ故、この箇所で、キリストは精神的にも肉体的にも、あらゆる不幸におけるわれわれの防御であるということが示されている。しかしこれらのことは、それのみが神学者をつくる体験なしには理解され得ない……[2]」。

Proponitur igitur hoc in loco Christus, quod sit nostra defensio in omnibus calamitatibus tam spiritualibus quam corporalibus. Non possunt autem haec intelligi sine experientia, quae sola facit Theologum, (WATR 1;16,13 Nr. 46, WA 25;106)

「神学者は、ただ単に聖なる事柄についての読書によってだけではなく、諸々の実験と実習によって形成されるべきである」。

Theologum oportet fieri experimentis et usu, non lectione tantum sacrarum rerum. (WATR5; 384, 5f. Nr. 5864)

「神学者になるのは、生きることによって、否むしろ死ぬことによって、また断罪することによってであり、理解したり、読書したり、または考察したりすることによってではない」。

Vivendo, immo moriendo et damnando fit theologus, non intelligendo, legendo aut speculando. (WA 5; 163)

以上にもとづいて、ェーベリングはルターの体験重視の思想を大胆に次のように定式化する。Sola …… experientia facit theologum. (体験のみが神学者をつくる)

また彼はここで、シュライエルマッハーの「神学者は懐疑と試練を通して (durch Zweifel und Anfechtung) でなければ円熟しない。それは古き真実な、また輝ける言葉である」。(SWI, 5, 246) を引用して「体験の神学」(Erfarhungstheologie) としてのルターとの呼応を指摘している。

しかしこのようにルターにおいて「体験」の強調が一方的に主張されても、彼の宗教改革が他方、「聖書」と「信仰」の決断に依存すること、またその両立がテキストからも推知されうる。

「私の教えの奇蹟は諸々の体験であって、私はそれらの体験を死人の復活よりも優先させる」。Miracula meae doctrinae sunt experienciae, quas praefero mortuorum resurrectioni, (WA 30, 2; 672f)

「私は二人の最も忠実にして不屈の証人、すなわち聖書と良心を有している。その良心とは体験である。良心は確かに幾千の証人であり、聖書は無数の証人である」。

Habeo duos testes fidelissimos et invictos scil. scripturam et conscienciam, quse est experiencia. Conscienciaenim mille testes, scriptura infiniti testes. (WA 30, 2; 673)

「(教皇党や熱狂主義者たちのような党派の人々が)説いているものは何であれ、彼らは決して見なかったし体験していない。彼らには聖書の証言が欠けているように体験の証言も欠けている。しかし、これに反してパウロは両者について語っている。すべての党派の人々は、自分たちが見なかったこと、聞かなかったこと、体験していなかったことについて教えている……使徒たちは、聖書と自分たち独自の体験について証言している。私は、神の恩恵により信仰について説くことができる。なぜなら私は、私のために聖書を、次いで体験をも所有しているからである。もしあなたが、すべての党派の人々を審問するならば、彼らは自分たちが体験を有していないことを告白せざるを得ないの

である」。

quicquid praedicant, nunquam viderunt, ertaren. Sicut mangeln testimonio scripturae, sic etiam testimonio der erfarung. Sed contra Paulus dicit de utriusque. Omnes Rottenses docent de eo, quod non viderunt, audierunt, experti sunt. ……

…… Apostoli praedicant scripturam und zeugen von yhrer eigen erfarung. Ego per gratiam dei possum praedicare de fide, quia habeo pro me scripturam, deinde etiam experientiam. Si quaeris omnes Rottenses, fateri coguntur se non expertos. (WA 36; 504〜506)

またヒーベリンクは、「体験のみ」(sola experientia)を「聖書のみ」(sola scriptura)、「キリストのみ」(solus Christus)、「言のみ」(solo verbo)、「信仰のみ」(sola fide)に対する「必要な註釈」(das notwendige Interpretament)[3]と解することによって、ルター固有の排他的言表「のみ」(solus)にもとづく両主張の矛盾を回避しようとする。

M・ニコルによれば[4]、「神学における体験の欠如」を指摘し、その際、同時にまた徹底してルターの神学に注目させたのはヒーベリンクである。しかし彼は上述のように「体験のみ」の確立を図ったが、この喫緊の問題の解決にはいたり得ず彼自身、「このテーマは、ルターに影響を与えている伝統を考慮しつつ緊急に新たな研究をすることが求められている[5]」というのである。

二

W・v・レーベニッヒは、[6] ルターにおける「聖書」と「体験」、「信仰」と「体験」の問題に論及して、大要次の如き所論を展開する。

先ず、新プロテスタンティズムのいわゆる「体験の神学」(Erfahrungstheologie)は、ルターを最初の証人となしうるか、という問を提起する。

シュライエルマッハー(Schleiermacher)、ヨルランゲン学派のホーフマン(Hofmann)、ヘルマン(W. Herrmann)などを「体験の神学者」(Erfahrungstheologen)と称するとき、注目すべきは、どの場合も「聖書」(Schrift)と無関係な「体験」を意味しないことである。

ホーフマンの場合、キリスト者たる彼が、神学者たる自己にとって、自己の学の最も固有の対象であることをのぞんだとしても、明かに「聖書の神学者」(Schrifttheologe)であった。

またヘルマンが自らの信仰の確かさの支えにしている体験の内容は、「イエスの内的生命」(das "innere Leben Jesu")との出会いであった。しかし、そのイエスの内的生命が顕わとなるのは、聖書の福音においてのみであった。特に注目されるのは「信仰論」(Glaubenslehre)におけるシュライエルマッハーの場合である。

ここでは、確かにすべての神学的命題が敬虔な自己意識の言表としてあらわれ、またそれらの信仰命題としての判断の基準は、それらが絶対依存の感情に還元できるという点にある。しかし、この判断基準はキリスト教真理の源泉としての聖書の言葉(das Bibelwort)が「内的照明」("innere Erleuchtung")のために失格するとはいわない。ひ

とはシュライエルマッハーの神学を「神秘主義か言葉か」(“die Mystik” oder “das Wort”)の二者択一に還元することはできないのである。

シュライエルマッハーの場合、また彼に依存する新プロテスタンティズムの体験の神学において重要なのは「確かさの問題」(Gewißheitsproblem)である。聖書の諸言表は、それらが個人的体験にと受け入れられるときにのみ、個人的な確かさの性格をもつ信仰命題となる。その点において、神学は体験に底礎するのである。

体験の神学は、思弁的、伝統主義的神学には対立するが、「聖書の神学」(Schrifttheologie)には対立しない。聖書の神学にとっては、聖書の「文字」(der Buchstabe)は体験において始めて「神の言葉」(“Wort Gottes”)となるのである。

ただ聖書の言葉それ自体が、個人的体験と無関係に、端的に信仰を要求する権威となる場合、もしくは、体験の神学が「心霊主義」(Spiritualismus)と誤解される場合にのみ、「聖書の神学」と「体験の神学」は相互に対立を示すのである。体験の神学の重心は、現代的表現をかりると神学的言表の実存的性格を確信することである。信仰の言表という意味における神学的言表の確かさは、思弁的にも、権威や伝統によっても底礎できないで、ただ実存的にのみ底礎しうる。そこに新プロテスタンティズムの体験の神学がある。

ついで論及すべきは、ルターにおける「信仰」と「体験」の問題である。

ルターが、単なる「史的信仰」(fides historica)、単に「事実と信じること」(das Fürwahrhalten)を、本来の意味における「信仰」として全く承認しなかったことは周知のことである。そしてそれは以下に明白である。

“fides historica”なら悪魔といえども所有する(WA 27, 492)。キリストが、自己自身のために誕生したことを信

じえないものにとっては、キリストの誕生は無益であった（WA 9, 518）。またそれは一切の、いわゆる救済の事実に妥当する。それらのことを単に知得（Kenntnisnahme）しても無駄であろう（WA 17, I, 86, 183）。

真実の信仰は全人間に関わるのであり、またそれは聖霊によって心のなかに働かれる（WA 25,327；2,722）。「言葉」（Wort）に底礎する信仰は、この言葉の理解と同様、聖霊の賜物である。しかるにルターによる『マグニフィカート』の講解が教えるように、体験は「聖霊自らの授ける教育修練」（die "eigene Schule" des hl. Geistes）である（WA 7, 546）。かくして信仰は体験より生じ、また体験を喚起する。

また、ひとは信仰を「感覚的に感じる」（"empfindlich fühlen"）ことができる（WA 6, 217）。神の恩恵は「よく感じまた体験できる」（"lasset sich wohl fühlen und erfahren"）し（WA 10, I, 1,115）、信仰によって「心の最も甘美な情感」（ein "dulcissimus affectus cordis"）が生じるともいわれる（WA 6,519）。

かくして、聖霊、信仰、体験、情感が一線に連なるのである。それ故、信仰はルターに頻出する有名な定式「あなたが信じるように、あなたは持つ」（"Wie du glaubst, so hast du"—Z. B. WA 40, I, 444）が示すように "Haben" でもある。

信じることができるものに体験が生じないことはない（WA 43, 367）。この意味で体験は信仰の判断基準でもある。無論、ルターにおける「信仰の体験」（Glaubenserfahrung）の可能性は、不断に「体験の不可能性」（Nichterfahrbarkeit）との緊張に立つのである。すなわち、この緊張を断ち切って「信仰の体験」が一方的に主張されることはない。信仰はいうまでもなく、「不可視にして隠されたもの」（das Unsichtbare, Verborgene）に向う（WA 18, 633）。信仰は暗闇に住む（WA 7, 551）。それ故、信仰はまた一切の人間的な「感情」（Fühlen）や「知覚」（Wahrneh-

mung) に対置されねばならないのであり、「感覚不可能性」(insensibilitas) ともいわれる (WA 5, 623) のである。「体験」と「信仰」の対立 (Nicht fühlen, sondern glauben—WA 7, 586) が、「体験」を「聖霊」の教育修練 (Schule) と称する『マグニフィカート』の講解にも見出される所以である。

思うに、信仰の体験は、対立する両者の結びつきとして、特殊の一体験、体験不可能なものの体験という高次の、逆説的な体験であり、それは聖霊のわざによると解するほかはない。

われわれが神の慈愛のなにがしかを体験し、また聖なる喜悦がわれわれの心をみたした場合、そこでは聖霊が「教師」(Lehrmeister) であった (WA 7, 548)。

さて、信仰が体験として表現されるとき、それは信仰が、単なる主観的思い込みなどではなく、「事実」(Realität) であることを示している。信仰は体験において、自己を確証し、単なる史的知識や思弁や単純に理論的な確かさから区別される。

したがって、信仰の生を「実験的生すなわち実地に体験された生」(vita experimentalis—WA 2, 499) と解するルターは、タウラーの神学を称揚して「実験的知恵であって、教義のそれではない」(sapientia experimentalis et non doctrinalis—WA 9, 98) すなわち、それは体験の神学であって教義や教説ではないことを強調する。

A・M・ハース[7]は「体験の神学者、タウラー」(Tauler, ein Theologe der Erfahrung) という項の冒頭に、「"Sola ……experientia facit theologum" という Erfahrung に対するルターの強い主張は、ルターをドイツ神秘主義の諸家、特にヨハンネス・タウラー——ルターはタウラーを一五一五年から一五四四年にかけて二十六回も、限りなく賛意をもって引用する——と結びつけることは明白である」と述べている。

ルターの神学は、信仰と試練（Anfechtung）との闘いから出発する。その故に体験の神学であり、その故に信仰の神学である。

ここでルターにおける聖霊の研究者R・プレンター[8]に聞こう。

「体験という教育に赴こうとするものは、先ず試練の荒野に導かれる。体験は、想像、単に考られたもの、もしくは描かれたもの、もしくは単なる言葉と対立して現実の証しを意味するが故に、試練に属するのである。信仰が体験であるということは……それが現実と関わることを意味する。他方、試練は、信仰とその対象とが単に想像や幻像にすぎないか、それとも現実であるかを決定する試験である。試練という灼熱の試験に耐えうるということは、現実として確証されることであり、体験するということである。試練の試みにおけるこの体験は、ただ聖霊によってのみ与えられるのである。……試練はルターの場合、生涯と思想を通じて極めて過激で、われわれに代っての、キリストと父なる神に対する聖霊の嘆きを他にしては、なにものもわれわれに向けられた試練の死と地獄の攻撃をまぬかれしめうるものはないのである。体験の本質は、聖霊のいいがたき嘆きにおける、われわれのためのこの執りなしが、われわれがこの嘆きにおいてそれと同じ形にせられ、またそれへと逃れゆくキリストが現実であって夢ではないということを証するということにある。われわれ自身の敬虔にのみ属するものは、試練において夢と消え去る。それに反して、聖霊の証しするところは、試練の試みのただなかにあって、体験された現実として存続するであろう。それ故、ルターは『マグニフィカート』講解の一節において、体験を聖霊の教育と称しているのである」「信仰の体験は真実の体験である。聖霊の証しによって信仰の体験が生じる場合、その体験者はひとつの現実に直面すること、否、あらゆる現実を凌駕する現実に直面することを疑わない。故にルターは、キリストを信じるものは聖霊を自己のうちに感じる

であろうと言ってはばからない。聖霊を感じるということは、すなわち聖霊の言いがたき嘆きを聞き、またそれにあずかることにほかならないからである」。

プレンターにおいては、聖霊と体験は「相関概念」(Wechselbegriffe) であり、聖霊・体験・福音は不可分離の共属を示している。聖霊なしに、すなわちまた同時に体験なくしては、聖書はただの「文字」「律法」にとどまる。したがってルターの意味における信仰を創造しえない。レーベニッヒはそれ故、ルターの場合、「体験の神学」(Erfahrungstheologie) と「聖書の神学」(Schrifttheologie) は、決して対立ではなく不可分離の「相関関係」(Korrelation) にたっているとするのである。そしてそのかぎりにおいて、新プロテスタンティズムの「体験の神学」は、ルターを証人とするのに十分な権利をもつというのである。

三

時の順序には逆うけれども、最後に、一つの手掛りとしてとり上げるのは、J・ヴェンドラントの論文[9]『聖書と体験——プロテスタンティズムの相関的両原理』である。

彼は次のルターのテキスト、すなわち「ひとはだれでも、ただそれが神の言葉であり、またそれが真理であると自分が心のうちに確信するがゆえにのみ、信じるのでなければならないのである」

"Es muß ein jeglicher allein darum glauben, daß es Gottes Wort ist und daß er inwendig befinde, daß es Wahrheit sei." (WA 10, II, 90)

にも示されているように、プロテスタンティズムの二つの相関的原理として、「聖書」(Schrift) と「体験」(Erfah-

rung)を挙げ、福音主義教会の永遠の基礎としている。[10]

ヴェンドラントは先ず、この問題に関するJ・A・ドルナー[11]のルター理解を示して「教会が聖書と共有した救済の内容(der Heilsinhalt)が、その内的な力によって(durch seine innere Kraft)ルターの心の中に確証されたのちはじめて、使徒的、予言者的聖書がルターにとって、決定的な規範や審判者になった」という。そしてこの消息をさらに明確にしたのが、ヴェンドラントの敬愛するG・ヴォッバーミン[12]であった。

「福音主義の信仰論にとって存在する唯一の資料、それは聖書である。自らの個人的信仰体験も信仰論の特別の資料ではない。だがそれは、理解の不可避的補助手段である。無論そのことは、ただ聖書に対する不断に新たな従属においてのみである……なぜなら究極的に重要なのは、われわれが経験的・事実的に体験することではなくて、われわれが神の意志に従って、すなわち啓示によって、われわれの信仰に、そのつど明らかにされる神の意志に従って、体験すべきことである」。

いうまでもなく、体験は聖書と無関係なそれではなく、救済の内容(啓示・キリスト)のもつ内的な力による、したがって神の意志に従っての体験であった。それゆえ、ルターの場合、個人的自己体験、自己体得(Selbsterfahren und Selbsterleben)の理想、ならびにルターがウォルムスで示したような、それから生じる大胆な自主性が、ルターを支える聖書の救済の啓示の力と全く分かちがたいということが明らかである。ルターの表現をかりれば、聖書は"Christum treiben"(キリストを強調する)であるかぎり聖書である。彼は大胆にも「もし反対者たちが、聖書をキリストに反して無理じいしたとすれば、われわれはキリストを聖書に反して無理じいする」とまでいうのである。

"Quodsi adversarii scripturam urserint contra Christum, urgemus Christum contra scripturam."(P. Drews,

Disputationen Dr. M. Luthers, 1895 S. 12 These 49.)

ヴェンドラントが「聖書」と「体験」をもって、宗教改革的原理の二重性、したがってプロテスタンティズムの相関的二原理としたことは注目にあたいすることであろう。しかしこの共属する両原理の相関性が乖離して、一方が一面的に主張されてはならない。

福音主義教会が、万一、主観的、自己的、個人的体験もしくは、その体験に伴う平安、調和、喜悦、力などの諸感情の上に底礎されるなら砂上の楼閣であろう。体験主義的主観主義、内在主義の破綻である。他方、その反対に、凡そ体験と無媒介に主張される聖書主義的客観主義は超越的啓示の権威をもってする他律的強制を招来し、中世教会や正統主義などのいわゆる教条主義(ドグマティスムス)に陥り易い。ルターが中世の「教皇党」(Papisten)に対して、ペテロ第一の手紙第二章の三や詩篇第三五篇の九などにもとづいて、体験(Erfahren, Fühlen, Schmecken, Empfinden)の必然性を強調したのも首肯できよう。

これら両側面の危機が共に止揚され、両者が媒介統一される途が不断に追究されなければならないのである。

ヴェンドラントによれば、[13] 真実の深い宗教体験は、神の革新的行為が人間によって把握されるところに成立する。なぜなら、それのみが人間の精神的要求に対応するものであるからである。神の言(啓示)と人間の最も深い宗教的要求の対応ないし相即は、聖書もアウグスティヌスも――『告白』の冒頭「あなたは、われわれをあなたに向けてお創りになった」によって推知できる――ルターも認めていたと思われる。しかし他方、人間の本質把握における問題性、すなわち、罪によっても絶滅しがたい人間のうちなる神の像、神の似姿が認められ、この補完、修復、充実がキリストの救済を意味することになる。ここに示される宗教体験における主体の自己同一的連続性には限りなき疑義が残る

であろう。

註

(1) vgl. G. Ebeling, Wort und Glaube III, 1975 S. 7 A. 5

エーベリンクは、ここで未完のルターの語集 (Stichwörterliste) のなかから、experiri と同じ語幹に連なる experientia, experientialis, experientialiter, experimentalis, experimentum, experior, experitus, expers 等の諸語、ならびに同義語、または同類語として、sentio, cognosco, apprehendo; affectus, cor, conscientia, usus, exemplum 等の諸語をひき出してそれぞれの使用頻度数を示すことにより、ルターの「体験」重視の傾向を推知せしめるひとつの手掛りとしている。

vgl. G. Ebeling, Evangelische Evangelienauslegung. Eine Untersuchung zu Luthers Hermeneutik, (1942) 1969, 391〜402

エーベリンクによると (Wort und Glaube S. 7 A. 6)、ルター自身も次のような言語分析をもって「体験」の必然性を説いている。

「たしかに ‚jada' という言葉は、われわれの判断によると ‚cognoscere' (知る) よりも広い意味をもっている。‚jada' は実際、単に思弁的な知識を意味するだけではなく、私にいわせれば感覚と体験を意味する。たとえば、ヨブが不信仰な人々について、『彼らは神に逆って行うということが何であるかを知るであろう』というとき、ヨブは『彼らは体験し、感じるであろう』といったのである。

かくして詩篇第五一篇で『わたしはわたしの罪を知っているから』とあるのは、すなわち「わたしはわたしの罪を感じ、また体験する」ということである。同様に創世記第三一章であなたが主を恐れているということをわたしは今知った」とあるのは、すなわち「わたしは実地に学んだし体験した」ということなのである……」。

Nam verbum *Iada* latius patet, quam apud nos ‚cognoscere'. Non enim tantum significat speculativam cognitionem, sed sensum et experientiam, ut sic dicam. Ut, cum Hiob dicit de impiis:, Cognoscent, quid sit contra Deum facere', vult dicere: experientur et sentient. Sic Psal. 51. [v. 5]:, Quoniam peccatum meum cognosco', hoc est, sentio et experior. Item Gen. 22. [v. 12]:, Nunc cognovi, quod timeas Dominum" hocest: Reipsa didici et expertus sum. (WA 42; 179)

(2) 特に断わりなきときの傍点は筆者による。

(3) G. Ebeling, Wort und Glaube III S. 12.
(4) M. Nicol, Meditation bei Luther, 1984 S. 86.
(5) G. Ebeling, Wort und Glaube III S. 12 A. 18.
(6) W. von Loewenich, Luther und der Neuprotestantismus, 1963, S. 329f. vgl. W. von Loewenich, Luthers Theologia crucis, 1954, 4 Aufl. S. 96～111, S. 118～129.
(7) Alois M. Haas, Sermo mysticus—Studien zu Theologie und Sprache der deutschen Mystik, 1979 (7. Johannes Tauler) S. 274.
(8) R. Prenter, Spiritus creator—Studien zu Luthers Theologie, 1954 S. 68, S. 69.
(9) J. Wendland, Schrift und Erfahrung—die beiden Zusammenhängenden Prizipien des Protestantismus, 1939 (Luther, Kant, Schleiermdcher in ihrer Bedeutung für den Protestantismus—Festschrift Georg Wobbermin 所収)
(10) ibid., S. 531.
(11) J. A. Dorner, Geschithte der protestantischen Theologie, 1867. S. 212f.
(12) G. Wobbermim, Richtlinien evangelischer Theologie, 1929. S. 23.
(13) J. Wendland, Schrift und Erfahruug S. 541f.

付記

退任する大学の殿務や就任予定の大学との折衝等々、身辺の怒忙に悩まされ、当初予定した論文とはほど遠いものとなってしまい、その上、提出の延引で多大の御迷惑をおかけしたことをおわびいたします。